

## 「上野の杜から(36)」

# 小松宮彰仁親王騎馬像

地球の温暖化が喧伝されて久しいものがありますが、当初はいろいろ懸念されていたものの今では現象的には認めざるをえなくなっているようです。なにやら理屈っぽい書き出しとなってしまいましたが、かつては4月の入学式の頃がソメイヨシノの見頃でした。それが今日では3月の卒業式の頃へと東京でのサクラの開花は移ってしまいました。

さて、東京でのサクラの名所と言え、やはり上野公園でしょう。春のお彼岸の声を聞く頃ともなると公園内のソメイヨシノは一斉に開花します。

今回の話はここからです。うすいピンク色の花の雲の中に軍装した乗馬姿の貴人のブロンズ像が眼にはいつてきます。場所は上野動物園の正面入り口の左側。



この人物は小松宮彰仁親王といいます。皇族伏見宮邦家親王の第8王子として弘化3年(1846)にお生まれになりました。その人生はなかなか波乱に満ちたものでした。

安政5年(1858)に親王は第120代の仁孝天皇の猶子となり、親王宣下を受け、仁和寺第30世の門跡となります。しかし、慶応3年(1867)には還俗を命ぜられ、仁和寺宮嘉彰親王となり、明治維新を迎えると軍事総裁に任じられ、戊辰戦争では官軍の指揮を執りました。宮号も東伏見宮と改められ、陸軍の要職を歴任。明治7年(1874)の佐賀の乱では征討総督として、明治10年(1877)の西郷軍との戦いであった西南戦争では旅団長として出征、乱の鎮定にあたりました。

維新以来のこうした功によって顕彰され、家格を世襲親王家に改められ、明治15年(1882)に宮号を仁和寺の寺城の旧名小松郷にちなんで小松宮と改称し、名も彰仁と改名。そして元帥まで昇りつめてゆきます。

小松宮は日本赤十字社、大日本水産会、大日本山林会など各種団体の総裁を務めるなど社会奉仕・事業には深い理解を示し、実践されました。今日の皇族の公務の原型を作る一翼を担われたと言ってもよいでしょう。

小松宮殿下は明治36年(1903)に薨去、国葬をもって見送られました。

殿下にはお子さまがなく、結果的には小松宮家は一代で絶家となりました。

上野公園のこの銅像は日本赤十字社設立25周年記念として靖国神社の大村益次郎像でも知られる彫刻家の大熊氏廣(1856~1924)が製作し、1912年3月18日に除幕式が行われたということです。同じ公園内にある西郷隆盛像と対照的な感じがしますね。



上野公園のサクラはまもなく見頃を迎えます。

